



 目次

生産現場情報：	水稻＋大豆＋ネギの複合経営拡大により所得増大を目指す ～農事組合法人 ファーム北野～	P 1～4
営農支援情報：	プラスチック被覆低減肥料への切替について	P 5～6
ご 紹 介：	第146回秋田県種苗交換会～先人に学び農業の未来をひらく スマート農業セミナーを開催しました 「秋田県農業法人協会との情報交換会」を開催しました 「フードバンクあきた」へ秋田県産食材を贈呈 ～フードドライブで集められた食品も提供～	P 7～8 P 9 P 10 P 10
お 知 ら せ：	スマート農業で収量アップしませんか？ ザルビオなら誰でも簡単に、スマート農業を始められます！	P 11

水稻＋大豆＋ネギの複合経営拡大により所得増大を目指す

農事組合法人 ファーム北野

1. 法人設立の経緯

農事組合法人ファーム北野は、秋田県のほぼ中央の沿岸部に位置している潟上市にあり、南は秋田市、西は男鹿市と隣接しています。潟上の地名は、八郎潟の上方（潟の上）に位置することに由来しています。

県都秋田市に隣接したベッドタウンという都市的な特性と、広大な田園風景に代表される豊かな自然環境を併せ持った地域となっています。

上出戸転作組合として、大豆集団転作のための組合を作り活動をしてきたものの、構成員1名が廃業する中、同時期に大規模農家1名が病気療養することになったことを契機に法人化の機運が高まり、集落営農の再編を模索し、J A秋田みなみ（現在、J A秋田なまはげ）、潟上市、秋田県の支援を受け勉強会を開始しました。

構成農家25戸で平成19年3月上出戸集落営農組合設立し、平成25年6月の先進農業法人組織研修後に話し合いを加速させ、同年10月から本格準備の開始、法人化のための全体会を開催して、11月には法人参加者の取りまとめを行いました。

平成25年11月30日に加入予定者説明会開催して、同年12月7日に法人設立準備委員会を立ち上げ、平成26年1月に農事組合法人設立しました。

■設立までのスケジュール

- ・作業体系の整理
- ・精算方法の一本化
- ・農地集積の方法検討
- ・事業目論見書の作成
- ・収支計画書の作成
- ・出資金1口金額の検討
- ・米の出荷方法の一本化
- ・代金精算方法の整理
- ・作業料金の設定
- ・農地の賃借料の決定
- ・法人尊重事項整理
- ・自家消費米の扱い事項の検討、協議

平成25年12月14日に法人加入予定者全体会

平成25年12月22日法人加入予定者説明会、
集落全体会開催

平成25年12月28日に発起人会の設立と設立
準備委員会開催

平成26年1月11日法人設立総会を経て、
平成26年1月に農事組合法人設立



代表理事 菊地 福一郎氏

概要

法人名：農事組合法人 ファーム北野

代表者：代表理事 菊地 福一郎氏

所在地：秋田県潟上市天王字細谷長根335番地3

構成：16名（うち役員：理事4名、監事2名）

設立：平成26年1月21日

令和5年度経営概要

■水稲	34.9 ha
・あきたこまち	6.6 ha
・ひとめぼれ	5.5 ha
・サキホコレ	5.9 ha
・ぎんさん	16.9 ha
■大豆	14.5 ha
■ネギ	1.96 ha
■施設	

・ライスセンター

(乾燥機3台、粳摺り機、色彩選別機、粒選別機)

・作業所 (ネギ作業用30坪)



稲刈り作業

2. 経営の特色

主な経営品目として、水稲をはじめ、集団転作大豆や長ネギを作付けしています。

水稲については、あきたこまち、ひとめぼれ、サキホコレと酒造用掛米として加工用需要が高い「ぎんさん」の栽培をしています。

刈り取り後は、ライスセンターにて乾燥・粳摺り・選別の調製を行った後に、全量フレコン出荷で、JAの常温・低温倉庫へそれぞれ搬入をしています。



大豆については、ＪＡをはじめ地区転作推進協議会の推奨する品種（リュウホウ）を作付けし、ＪＡに販売を委託しています。

長ネギは、夏ネギ、秋冬ネギを基本としていますが、今年度は地元市場より夏ネギまでの繋ぎとして依頼された「葉ネギ」を６月下旬～７月上旬にかけて日量２０ケース（６ｋｇバラ詰め）の出荷をしました。

夏ネギ・秋冬ネギは、結束・バラのダンボール出荷と２５０ｇ／袋×２０袋入（５ｋｇコンテナ詰め）による作業効率と契約値決め販売により、所得安定と生産性向上を目的とした、ＪＡ秋田なまはげ「NAMA HAGE AGR I YELL PROJECT」の一環としてオリジナルの袋ねぎの販売をし、市場、量販店からは高い評価を得ています。

■ネギの作業工程：葉ネギ



①地元市場出荷の葉ネギならではの手作業での掘り取り作業



②根ほごし作業



③根切り、皮はぎ作業



④調整作業
（等級仕分け・葉切り）



⑤箱詰め



⑥ダンボールへのバラ詰め（６ｋｇ）

■ネギの作業工程：夏ネギ



①自動収穫期での掘り取り作業



②根ほごし作業



③根切り・皮はぎ作業



④重量選別機で選別



⑤調整作業（等級仕分け）



⑥調整作業（軟白拭き取り）



⑦結束作業



結束ネギ（5 kg）



袋ネギ（5 kgコンテナ）

3. 今後に向けて

現在、個人で行っている農家も高齢化が進んできており、近い将来は、当法人に耕作依頼が集中してくることはほぼ確実です。法人としても労働力の確保等に向けた取り組みを進めていかなければならないが、同時に法人の財務基盤の強化や農業機械の導入、更新計画を適正に進めて、地域農業を守るための取り組みも必要だと話されていました。



プラスチック被覆低減肥料への切替について

化学肥料は、現代の生産性の高い農業経営に欠くことの出来ない基礎的な生産資材となっています。我が国においては、化学肥料の安定供給を通じて国産農産物の安定生産を実現し、更には国民の皆様への安全・安心な食料の供給に貢献してきました。

このうち、プラスチック等で被覆加工した被覆肥料は緩効性肥料とされ、作物の生育に合わせて肥効特性を適切にコントロールできることから、環境負荷の低減効果、農作業の省力効果等を高く評価いただき、我が国における農業生産の高度化に貢献してきました。

特に環境面では、作物の生育に使われない無駄な肥料を減らすことができるため、肥料の投入量の削減が図られ、地下水などの水域への栄養分の流出抑制、温室効果ガスである一酸化二窒素の発生抑制など、環境面での効果が期待される技術と位置付けられてきたところです。

こうした中、2015年に「持続可能な開発目標（SDGs）」が国連サミットで採択されたこと等を背景に、国内外においてプラスチック資源循環のあり方の議論が活発となりました。

それを受け化学肥料を扱う本会では、2018年から2019年にかけて「プラスチック資源循環アクション宣言」を公表し、緩効性肥料におけるプラスチック被膜殻の海洋流出防止等に向けて、農業者への注意喚起、被膜殻の分解性の向上等に向けた技術開発、他の機能性肥料の活用拡大等を推進する基本的な方針を表明し、これに沿った取組を進めています。

◆ 被覆殻の流出防止



浅水代かき(強制落水の防止)
被覆殻の浮上による流出を防止します。土壌を酸化的に保ち、健全な根系になります。



無落水田植え
直進アシスト/キープ田植機で実施。水管理も省力化できます。



水尻の流出防止対策
やむを得ず強制落水する場合に使用します。同時に藁も上げるので異常還元を回避できます



●コンセプト

○「肥料マイクロプラスチック低減」の課題に取り組むため、現行品よりもプラスチック被覆尿素有の含有量を20%削減し、圃場からの流出を防ぐことを目的としています。

○プラスチック被覆尿素有の含有量を削減していますが、従来タイプと肥効が変わらないよう設計しています。

●銘柄

○これまでご愛顧いただきました基肥一発肥料『基肥まくモン』『基肥エース』『Newハイセラ25』から以下の銘柄にリニューアルし、令和6年作用より切り替えていきます。

『基肥まくモンX』	『基肥エースX』	『Newハイセラ64』
 	 	 

本会では、「プラスチック資源循環アクション宣言」を具体化することとし、「2030年にはプラスチックを使用した被覆肥料に頼らない農業に」を目標に掲げ、さらに努力してまいります。

第146回秋田県種苗交換会～先人に学び農業の未来をひらく

第146回秋田県種苗交換会（主催：ＪＡ秋田中央会）が11月2日から11月6日までの5日間、潟上市を会場に開催され、「潟上から 聖農の思い 未来へつなげ」をキャッチフレーズに、県内から出品された農産物の展示のほか多彩な催しが行われました。



主会場の天王総合体育館では、水稻や野菜、果樹、花きなど8部門に出品された約1,000点の農産物が展示され、優れた農産物の出品者には農林水産大臣賞をはじめとする褒賞が贈られました。



「JA全農あきたの「秋田米コーナー」では、「サキホコレ」の特長や開発の歩みなどをパネルで紹介しました。



秋田県牛乳普及協会（事務局：JA全農あきた）は、牛乳の試飲や牛の顔を完成させてもらうお絵描きブースなどを設けPRを行いました。



協賛第2会場では「農業機械化ショー」が開催され、最新のトラクターやコンバインなどの展示・実演が行われ、初日から多くの人で賑わいました。同会場の「JA全農あきた展」では、肥料・農薬・農業用資材の展示・紹介や「肥料・農薬相談コーナー」が設けられました。



来年の「秋田県種苗交換会」は、鹿角市で開催される予定です。

スマート農業セミナーを開催しました

ＪＡ全農あきたは１１月２日に県内ＪＡのスマート農業に携わる担当者を対象に、スマート農業セミナーを開催しました。

今回はリモートセンシングの活用に重点を置き、株式会社ファーム・フロンティアの藤井弘志取締役会長より、リモートセンシング結果から圃場状態が見える化する必要性などを生産者からの声を交えて講演していただいたほか、ＤＪＩＪＡＰＡＮ株式会社の岡田善樹氏から最新農業ドローンの情勢について、コニカミノルタ株式会社の齋藤毅氏からセンシングデータの解析方法について講演いただきました。



(株)ファーム・フロンティアの藤井弘志取締役会長



ＤＪＩＪＡＰＡＮ(株)の岡田善樹氏

参加者からは「リモートセンシングは圃場の生育のバラツキをなくし収量向上を図るうえで必要な技術だと感じた」などの声が聞かれました。そのほかＪＡ全農あきた営農支援課より営農管理システムＺ-ＧＩＳの特徴や活用事例を紹介しました。



コニカミノルタ(株)の齋藤毅氏



営農管理システムＺ-ＧＩＳ活用事例紹介

ＪＡ全農あきたは、ＪＡ担当者がスマート農業に関する情報に触れ、生産者に対し情報提供できるよう今後も研修会を開催していきます。

「秋田県農業法人協会との情報交換会」を開催しました

J A全農あきたは11月9日、秋田県農業法人協会との情報交換会を開催しました。今年で17回目となる今回の情報交換会には、秋田県農業法人協会とJ A全農あきたの関係者28名が参加しました。

J A全農あきたの小林和久県本部長は「原油価格の高騰、生産資材価格の高止まりにより、農家経営は非常に厳しい環境下であるが、本会として、農産物の適正価格への反映を働きかけながら、生産コスト低減等持続可能な農業のために、皆様と一緒に取り組んでいきたい」とあいさつしました。

情報交換会では、J A全農あきたの取り組みとJ A秋田中央会から労働力確保対策について報告をいたしました。

参加した会員から、資材の高止まりを受け再生産可能な適正価格への取り組み、労働力確保、物流対策への要望などについて活発な意見が出されました。



上段：J A全農あきた 小林和久県本部長

下段：秋田県農業法人協会 桜田善仁会長

「フードバンクあきた」へ秋田県産食材を贈呈 ～フードドライブで集められた食品も提供～

J A全農あきたは11月7日、一般社団法人フードバンクあきたへ秋田県産あきたこまち精米60㌔とジュース「のむ」トマト」40箱を贈呈しました。また、J A全農あきたと県内全農グループ会社の職員が自らの行動により経済的に困窮する家庭への食を通じた支援につなげようと、家庭で余った食品を集めて支援が必要な人に届ける「フードドライブ」に取り組み、集められたレトルト食品やお菓子、飲料などを提供しました。



写真左から：一般社団法人フードバンクあきた林多実代表理事、J A全農あきた山中嗣貴副本部長

スマート農業で収量アップしませんか？

ザルビオなら誰でも簡単に、スマート農業を始められます！

xarvio®FIELD MANAGER は、人工知能（AI）を活用した栽培管理支援システムです。栽培管理記録や計画はもちろん、その年の気象条件や品種などを考慮した予測結果を基に、圃場毎の推奨作業を提案し、栽培管理の最適化を支援します。



（１）栽培管理記録

- ・圃場毎に栽培管理の記録を行えます。
- ・過去の作付情報や管理記録内容も保存されます。

（２）作業計画・指示

- ・作付計画や、耕起、水管理、散布作業などを複数圃場へ一括入力できます。
- ・天候状況を確認しながら作業計画が立てられます。
- ・作業計画を他者へ指示することができます。

（３）AI による栽培管理支援

- ・生育予測により水管理や施肥等の管理タイミングをお知らせします。（水稻）
- ・病害発生予測により防除タイミングを推奨します。（水稻）
- ・大豆の生育にあわせた雑草防除タイミングを提案します。（大豆）

（４）栽培管理に活用可能な情報を提供

- ・気象情報（過去、予報）
- ・地力、生育マップ
- ・土壌マップ

